

◆交通事故を起こさないための対応策を学ぼう

1 対象児童生徒（対象学級）の実態 <ul style="list-style-type: none">・高等部 産業科・普通科生徒（知的障害） 卒業後、社会的自立を目指し各種事業所等での就労をめざす生徒を対象とした。これらの生徒は将来を見据えて在学中に安全・安心な生活をめざすために、社会生活において身近にひそむ危険な事案について知識を深め、それらの対応策等を身に付ける必要がある。
2 指導目標 <ul style="list-style-type: none">・ICT機器を活用し、日常生活での身近な危険事例や自分のからだの仕組みを、簡易的でわかりやすく理解させ、対応策等の知識を定着させる。
3 取組の中心となる教科・領域等 <ul style="list-style-type: none">・理科 週1時間（産業科） 生活単元学習 週3時間（普通科）
4 使用したアプリ、周辺機器 <ul style="list-style-type: none">・iPad カメラ、錯覚体験用アプリ、盲点検査用アプリ
5 指導の経過及び児童生徒の変容 産業科6時間 普通科3時間 <ul style="list-style-type: none">・錯覚実験 iPad のカメラ機能を利用した。iPad のカメラは単眼であり、ちょうど人が片方の眼を閉じた状態で物を見た状況が再現できる。振り向きドラゴン（工作物）は片眼で見ると首をひねる様子が確認できるが、両方の眼で見ると首をひねる動作は確認できない。これは、両方の眼で見た情報を脳が人の意思とは別に情報処理をおこなない、遠近感や立体感を作り出しているものである。これは脳の後頭部において情報処理がおこなわれることを生徒に説明し、眼は視覚情報を取り入れるための器官であり、情報処理は脳がおこなっていることを認識させる。そして、後頭部を強打しないように気を付けることを促すとともに、卒業後原付バイク等を運転する場合は必ずヘルメットを着用することを認識させる。 産業科・普通科ともに実施をおこない、言葉で説明して理解を促す方法と比較して、より効果的に授業を進めることができた。産業科では、幼い頃、保護者から後頭部を強打しないように注意された理由が今回の授業でわかったと述べた生徒もいた。・盲点実験 盲点実験アプリを使い、個人の眼の盲点を認識させる。盲点は、眼の構造の網膜の一部に視神経が出入りしているため、その部分にピントが合ってしまったものは視覚が発生しないことを認識させる。その部分がどのような距離感で発生するのか実際アプリを利用して認識させる。将来的に運転免許証を取得しようと考えている生徒にとって、交通事故を防ぐために知っておいてもらいたい内容である。 産業科において実施したところ、眼における盲点の存在について、その不思議さに驚いたようであった。

6 指導のポイント（変容の要因、効果的な支援方法等）

授業の展開方法としては、タブレット型端末を使用せずに授業をおこなう方が効果的な内容もある。すべての授業においてタブレット型端末で授業をおこなうことが良いとは思わない。今回実施した授業は、その方針として、タブレット型端末ですべての単元において実践するのではなく、授業の中でタブレット型端末を補助機器として効果的に利用する展開方法であった。この授業を通して将来原付バイクの免許や普通自動車免許の取得を考えている生徒には、免許の取得後、実際運転をする時にひそむ危険性等をわかりやすいように授業を実践する。さらに日常生活にひそむ危険を、わかりやすく理解させ、安心、安全な生活ができるよう支援をおこなうことをめざしている。

教える側の立場として、タブレット型端末を利用することは授業の教材が容易に作成でき、準備なども簡単におこなえるので、かなりの時間短縮が期待できる。また、授業の展開において、板書した授業内容をすぐ端末に記録し、同じ授業時間内において投影することで情報を再利用する方法も考えられる。これらのことはコンピュータで同じことを実施することと比較しても、タブレット端末は優れていると考える。

生徒は、タブレット型端末を利用して授業を実施することはとても気に入っているようである。